

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館ニュース

No.9
Autumn
2007

『小男の草子』

目次

■立川新施設へ移転迫る!2

立川移転記念特別展のご案内

■「日本古典文学学術賞」の制定について.....3

■お知らせ.....3

立川移転にともなう資料利用サービスの
停止について

■トピックス.....4

子ども見学デー

日仏国際研究シンポジウム

学术交流協定締結

海外の日本文学研究者との懇談会

立川移転記念事業講演会・シンポジウム

「一千年目の源氏物語」

■大学院教育7

日本文学研究専攻における学位授与

日本文学研究専攻特別講義

■エッセイ(高木 元).....8

■付録 研究余滴(大高洋司)

立川新施設へ移転迫る!!



▲新施設南側外観

当館は、平成20年2月、品川区から立川市に移転し、4月には新施設の閲覧室がオープンいたします。いよいよ新しい施設への移転が迫ってまいりました。

立川新施設では、広々としたスペースを活用して、図書、雑誌、紙焼写真本など開架図書を大幅に増やし、広いスペースでゆったりと資料を閲覧することができるようになっています。また入口には3階までの吹き抜けとなり開放感を感じていただける交流アトリウムを設置しました。その他、設備拡充した展示室での企画展の開催やバリアフリー対応など利用者の皆様の利便性を考慮した施設に生まれ変わります。



▲新閲覧室
(閲覧カウンター周辺)



▲図書ラウンジ



▲新展示室

～新施設のご案内～

所在地：東京都立川市緑町10-3

交通：多摩都市モノレール高松駅下車
徒歩7分

(JR中央線立川駅乗換)

●立川移転記念特別展のご案内

立川移転記念特別展

よみがえる時 ―春日懐紙を中心に―

当館には、和歌・歌謡・物語・軍記など、古典の名作の数々について、約120点の貴重書を所蔵しています。これらは館内外のさまざまな研究活動を礎として集められてきました。その研究成果を盛り込み、日本人の「こころ」と「ことば」の世界を、親しみやすくご紹介いたします。

□日 時：平成20年5月26日(月)～6月20日(金) 10:00～16:30

□会 場：国文学研究資料館(立川市緑町)展示室

□休館日：土曜・日曜

～「日本古典文学学術賞」の制定について～

このたび国文学研究資料館賛助会では、新たに「日本古典文学学術賞」を制定することになりました。この日本古典文学学術賞は、財団法人日本古典文学会が日本古典文学会賞を継承するもので、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的としたものです。本賞の対象者、選考方法等は次のとおりです。

- 賞の名称：日本古典文学学術賞
- 主 催：国文学研究資料館賛助会
- 対 象 者：40歳未満の若手研究者
- 対象とする業績、期間：

前年の1月から12月までに公表された、日本古典文学に関する論文又は著書（古典と近代、古典文学と国語学その他隣接諸学とにまたがるものを含む）。第1回に限り、平成18年1月から平成19年12月までの2年間の業績を対象とし、第2回以降は前年分を対象とします。
- 選考方法：国文学研究資料館賛助会に選考委員会を置き、選考委員会で選考します。
- 発表時期：平成20年8月の予定です。（第2回以降は毎年6月の予定）
- 発表方法：本誌及びホームページ等にて公表の予定です。
- 賞・賞金：賞状と賞金20万円
- そ の 他：賞の基本的な性格は、日本古典文学会賞を引き継ぐものとします。



お知らせ

●立川移転にともなう資料利用サービスの停止について

移転準備のため、資料利用サービスを以下のように停止しております。現在、開架書架を増やした使いやすい閲覧室として新しく開室するために、日本文学部門と歴史部門を合わせ、図書を再編成し、ブック・ディテクション・システムの導入に向け磁気テープを装着する等の作業を進めております。

サ ー ビ ス の 種 類	停 止 期 間
来館利用（閲覧・来館文献複写受付 他） 資料撮影	平成19年10月 ～平成20年3月
資料掲載翻刻申込受付 相互利用（文献複写受付・図書館貸出）	平成19年11月 ～平成20年3月

平成20年4月より立川新施設にて業務を再開いたします。

皆様には大変ご迷惑をおかけしますが、何とぞご理解をいただきますよう、お願いいたします。

表紙絵解説『小男の草子』（請求記号99-119）

絵巻1軸。外題欠。内題「小おとこ」。延宝・貞享頃写。1紙17.2cm×48.0cm前後（全21紙）。『室町時代物語集』第5に本文が紹介された清水泰氏旧蔵本（桐箱入り）。御伽草子の一。内容は奉公人の小男が、清水参詣の美しい高貴な女性に恋をし、いったんは拒絶されるが、当意即妙の歌の応答によって、恋を成就するという話。

トピックス

●子ども見学デー

当館では、去る8月22日(水)に小学生を対象とした「子ども見学デー」を開催しました。当館が法人化された平成16年度より開催しているこのイベントは、今回で4回目。この催しは、地元・品川区の広報誌「広報しながわ」や「ケーブルテレビ品川」で紹介され、区内の小学生保護者等、十数人が参加しました。

鈴木副館長の挨拶のあと、相田助教の「コンピュータ漢字のお話」、山下教授の「夏の百人一首・カルタ取り大会」の講義(お話)が行われました。

「コンピュータ漢字のお話」では、漢字の数はいくつあるか、一番画数の多い漢字は何か、などの説明が画像を使って行われ、また「夏の百人一首・カル



▲講義風景

カルタ取り大会▶



▲昔のカードゲーム等の説明

タ取り大会」では、カルタの歴史や歴史的仮名遣いの説明のあと、小学生と保護者に分かれて、百人一首カルタ取り大会が行われました。

休憩時間には、展示した館所蔵の江戸時代の絵本、昔のカルタなどを見学し、親子揃って古典に親しみました。

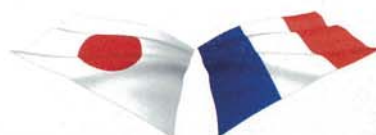
来年2月の立川移転を控え、今回が品川区での最後の開催となりましたが、参加者からは「立川に移転してもぜひ参加したい」との声もあがっていました。

●日仏国際研究シンポジウム

9月25日(火)、当館にて日仏国際研究シンポジウム「集と断片—国際共同研究の新たな視界—」が開催されました。

第1部の研究発表では、日本側から佐々木孝浩氏(慶應義塾大学ス道文庫)の「蹴鞠を詠む和歌—成通影供歌を中心に—」、フランス側からはジュリアン・フォーリ氏(フランス国立東洋言語文化大学)の「生涯を綴る韻文—平安時代の述懐百韻詩をめぐる—」と、それぞれご発表いただきました。

第2部は「国際共同研究の新たな視界」と題してシンポジウムを開催。千本英史氏(奈良女子大学)を司会に、ミシェル・ヴィエイヤール＝パロン氏(フランス東洋言語文化大学)、ジョセフ・キブルツ氏(フランス国立科学研究センター)、海野圭介氏(ノートルダム清心女子大学)、中川成美氏(立命館大学)、小峯和明氏(立教大学)、谷川恵一氏(国文学研究資料館)が、それぞれの所属機関における研究及び教育状況について報告。日本文学研究にも押し寄せるグローバル化の状況を見据えて、今後ますます国際協力体制の充



▲シンポジウムの様子

実化がもとめられることが確認されました。

当日は事前の宣伝が不十分であったにもかかわらず、国内外の研究者や留学生など50名近くの皆さんで座席がほぼ埋まり、日本文学研究の“国際化”に対する関心の高まりを感じることができました。

●学術交流協定締結



◀▼調印式の様子



当館では、8月29日(水)に「サピエンツァ」ローマ大学(イタリア共和国)と学術交流協定を締結しました。ローマ大学からはGuarini総長、総長秘書Matilda氏、Mastrangelo先生、D'amore経理部長の4名が来館し、館長室で協定の調印式が行われました。当館とローマ大学との今後の交流について意見交換が行われた後、鈴木副館長の案内で館内を見学、友好を深めました。今回の学術交流協定締結で予定していた海外の機関との交流は完了しました。

●海外の日本文学研究者との懇談会

当館では、昨年度から海外の日本文学研究者を招き、その国における日本文学の研究状況等を伺いながら、意見や情報を交換し、研究者相互の継続した国際交流・研究交流を展開することを目的とした懇談会を開催しています。

第8回目は、4月26日(木)、ジル村上サカエ氏をお招きしました。ジル村上サカエ氏は、アルザス欧州日本学研究所(CEEJA)、副所長です。

同氏が所属されているこの研究所は、フランスのアルザス地方とオー・ラン県の共同出資により設立された半公的機関です。この地方における日本学・日本文化の発信機関で、ヨーロッパ全体における日本研究の助成機関です。今回は、オー・ラン県が管理し、アルザス・欧州日本学研究所が利用希望企画を受け付ける役割を任されている「キーンハイム施設」の紹介が主な内容でした。アルザス地方は、ドイツ国境に近く、スイスやベネルクス3国にも利便な地域に位置し、現在まで、



▲ジル村上サカエ氏

25年間にわたって日本と友好関係を結んでいて、日本語教育の授業を行う高校や、日本学科のある大学があり、まだ調査されていない日本文献等も多くあるとお話でした。アルザスワイン街道の中途にあり、19世紀の古城を再施設化したという日本式風呂のあるキーンハイム施設は、詳しい日本語の案内パンフレットも用意されていて、夕日に映える葡萄畑のイメージとともに、郷愁に近い親しみを呼び起し、参加者一同、いつか訪問したい施設の一つとなったようです。



第9回目は、9月26日(水)、エルキン・ヒュセイン・ジャン氏をお招きしました。エルキン氏は、当館アーカイブズ研究系外国人研究員(客員准教授)です。

同氏は高校生の時から、東洋の神秘的な文化に惹かれ日本に興味を持ち、アンカラ大学の日本語学科に入学、その後来日して北海道大学に留学されました。以来、宮沢賢治、芥川龍之介、太宰治、川端康成、村上龍などの日本文学のトルコ語訳版を10冊以上発表しておられます。現在は『源氏物語』のトルコ語の翻訳作業中とのことで、来年の出版に向けて大詰めを迎えています。今後も日本とト



▲エルキン氏

ルコの関係、人々の交流が一層進むよう、活動していきたいそうです。参加者もトルコに強い関心を持ち、多くの質問が出され、時間が経つのを忘れてしまうほどでした。

●立川移転記念事業 講演会・シンポジウム「一千年目の源氏物語」

当館は、来年2月に立川市に移転し、4月に開館することになっております。その記念事業の一環として、9月22日(土)午後1時より、アミュー立川(立川市市民会館)にて、講演会・シンポジウム「一千年目の源氏物語」を開催いたしました。2008年は、『紫式部日記』が『源氏物語』について記した寛弘5年(西暦1008年)からちょうど1000年目にあたる記念の年です。各地の博物館・学会でもさまざまな記念行事が予定されておりますが、当館はそれに先駆けて、識者の方々をお招きした講演会・シンポジウムを開催したという次第です。総合司会は、加藤敬子氏(NPO 日本朗読文化協会)、参加者は約1200名でした。当日のプログラムは次のとおりです。

開会の辞 鈴木 淳(当館副館長)

挨拶 清水庄平(立川市長)

基調講演

大岡 信(詩人)

「近江の君について」

岡野弘彦(歌人)

『いろいろのみ』の女神と光源氏

—神話から物語へ—

丸谷オ一(作家)

「昭和が発見したもの」

加賀美幸子(NHK番組キャスター)

「私にとっての源氏物語」

シンポジウム「一千年目の源氏物語」

パネラー：大岡 信・岡野弘彦

・丸谷オ一・加賀美幸子

・伊井春樹(司会)

閉会の辞 伊井春樹(当館館長)

大岡氏は、滑稽であるが「あはれ」を誘う存在として造型された近江の君について、岡野氏は、『古事記』のイザナミ・イザナミの神話から『源氏物語』へつながる女性性の系譜について、丸谷氏は、20世紀が戦争の時代だったがゆえに『源氏物語』の文学性が再発見されたという問題について、それぞれ御講演くださいました。また、加賀美氏は、アナウンサーとして古典にかかわって来られた御経験にもとづいたお話をされ、実際に『源氏物語』の名場面を朗読してくださいました。

シンポジウムでは、大岡氏は、「千年前にこれが日本で書かれたことは、人類史上特筆すべきこと」と述べられ、岡野氏は、「源氏は女性が神に近かった古代人の伝統を受けつぎ、『漢才』に対する日本人の大和魂を伝えている」と述べられました。また、丸谷氏は、「小説で大事なものは構成と文体。それを両方そなえた長編小説の模範を千年前に持っていることはすばらしい」と述べられ、「まずは若菜巻という優れた巻から原文で読んでみる」との発言がありました。加賀美氏は、「あまりむずかしく考えず、まず近づくことが大事」「とにかく声に出して読んでみてください」と語られました。

なお、当日の様子は、「東京新聞」(10月5日付夕刊)、「朝日新聞」(10月10日付朝刊)、「日本経済新聞」(10月20日付朝刊)などで紹介され、また、10月14日、午後6時から、NHK教育テレビ「日曜フォーラム」でも放送されました。



▲シンポジウムの様子

大学院教育

●日本文学研究専攻における学位授与

9月28日(金)、葉山の総合研究大学院大学本部において、日本文学研究専攻の中島次郎君(平成15年入学、第1期生)に博士(文学)の学位が授与されました。専攻内での審査を経て、9月14日の文化科学研究科教授会で審議、承認されたものです。中島君の論文題目は『『淋敷座之慰』の研究—近世前期歌謡とその周辺—』です。日本の中世末期～近世前期は、歌謡と踊りがきわめて盛んになった時代なのですが、その具体的な様相についての実証的解明は、進んでいるとは言えませんでした。中島君は、近世前期歌謡の写本資料として最も基本的な『淋敷座之慰』を、式亭三馬旧蔵本(国立国会図書館所蔵)に基づいて詳細に検討し、歌謡研究を前進させる、新たな見解をまとめています。

中島君の学位授与は、当専攻としては2人目にあたり、これで1期生は2名共めでたく課程博士としてのゴールを迎えたことになり

ます。ご指導をたまわりました専攻内外の先生方、事務の皆様のご尽力に深謝し、論文博士も含め、今後も続々と博士の誕生が続くように、多方面からのご支援をお願い申し上げます次第です。



▲学位審査の様子

●日本文学研究専攻特別講義



▲講義風景▼

日本文学研究専攻では、平成16年以降、通常のカリキュラムにはない特別講義を設けております。基本的・応用的・先進的な研究動向を踏まえて、本専攻の学生の専門性を高めると同時に、先進的な日本文学研究を行うための広い教養・知識を身につけることを目的として、年間2回程度行われており、専攻内外の先生方に、分野にこだわらず講師をお願いしております。

なおこの講義は、専攻内のみならず、国文学研究資料館、総研大全研究科にも開かれたものとなっております。

今年度は、7月12日(木)、国文研大会議室において、次のように実施いたしました。

- ・小川剛生(文学資源研究系准教授)
「南北朝の政治と文化—二条良基と足利義満の和漢聯句—」
- ・黒須正明(メディア教育開発センター研究開発部教授、総研大文化科学研究科長)
「人工物とのつきあい方—ユーザー工学からのアプローチ—」

両先生は、緻密な国文学研究と、時代の先端を行くユーザー工学、学問的には両極端のお立場から、聴講する学生に感銘と刺激を与えて下さいました。特別講義の講義録は毎回冊子として発行されており、小川先生が第11号、黒須先生が第12号にあたります。

今年度後半は引越準備のためお休みしますが、立川移転後も引き続き実施する予定です。

エッセイ

個人蔵書のアーカイヴ

高木 元 (千葉大学文学部教授、
複合領域研究系客員教授)

国文学研究資料館が設立されたのは1972年だということから、小生がまだ高校生だった頃だ。その後、今はなき東京都立大学に入学し2年次に専攻を国文に決め、資料館(我々の世代は国文研と云うより資料館と呼び做わしてきた)を初めて訪れたのは1974年頃であったと思う。

当時の利用者番号は氏名の最初のように数字を足したもので、タ0000xという早い番号をだだったと記憶している。しかし、当時の資料館には図書資料が充分には備わっておらず、何も配架されていない書棚がずらっと並んでいた。もっとも30年以上も昔のことではあるが。

前館長である松野陽一氏が発見して目録を作成された八戸市立図書館の南部松平家旧蔵本に、良質な読本を多数蔵することを知り、公開当初には幾度となく八戸に出掛けて調査閲覧したものであるが、有難いことに現在は資料館でマイクロフィルムの閲覧が可能になっている。

昨今は資料館に足を運びさえすれば必要な研究文献は大概何でも複写できるし、全国各地に散在している資料の紙焼写真やマイクロフィルムも充実しており、国文学研究には不可欠な機関となっている。

永年お世話になった一利用者として、特筆すべき恩恵にあずかったことがある。それは、故中村幸彦氏がその蔵書の大半の写真撮影を許可されて一切の制限無く(すなわちサービス区分Aとして)公開されたことである。読本を専攻することにした小生にとって、当時は中村本しか所在が知れなかった多くの読本を資料館で読むことができた。さらに一夜貸しという制度があり、紙焼写真の貸出しを受

けて一晩持ち帰ることができた。一体幾夜にわたって中村先生旧蔵の読本に読み耽った晩があったことか。あたかも横山邦治先生と同様に、中村先生の蔵書を自由に読むことができたのである。この経験は現在に至るまでも、かけがえのない経験であり続けている。

個人蔵の蔵書の末路は様々である。中村先生の蔵書が関西大学に納まり、閲覧に供されているのは幸いであった。多くの個人蔵書が散逸してしまう中で、資料館のアーカイヴスとして残すことは有効だと思う。現に抱谷文庫などをはじめとして、資料館の個人蔵書のアーカイヴスに拠って多くの学恩を蒙っている。

一方、故林美一氏の蔵書は市場に出回ったものも少なくはないのであるが、大半は立命館大学ARCに納まり、赤間亮氏らによって精緻な目録が作成された上で、画像データ化されインターネット上に公開されつつある。紙焼写真のようにモノクロではなくてカラーなので、より利用価値の高いデータだといえる。

資料館も近代部門から順次画像データを公開しつつあるが、画像データとしてインターネットに公開すれば、世界中の利用者が容易に使えるようになる。

周知の通り、国内に於ける国文学研究は衰退の一途にあり、最後の拠点が資料館であることは間違いない。全世界に開かれた国文研になるためにも、今後も積極的に個人蔵書を調査収集してアーカイヴし公開する事業を推進して欲しい。

ちなみに、拙菟書等も資料館でアーカイヴして公開して欲しいものである。

国文学研究資料館ニュース No.9

発行日 平成19年11月30日
編集 国文学研究資料館広報委員会
発行 人間文化研究機構 国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature
〒142-8585 東京都品川区豊町1-16-10
Tel:03-3785-7131 Fax:03-5751-7166 <http://www.nijl.ac.jp>
印刷所 有限会社 スミダ ©人間文化研究機構 禁無断転載



当館では、古典籍及び図書の寄贈を受け付けております。御刊行・御所蔵の資料を広く研究に活用させていただくために、皆様のご協力をお願いいたします。

〈稗史もの〉読本様式の解明

大高洋司（文学資源研究系教授）

読本研究のパラダイムと「通説」

日本文学史の用語としての〈読本（よみほん）〉は、江戸時代中・後期（18世紀中葉～19世紀中葉）の100年余りの間に制作・刊行され、半紙本5巻5冊を標準形とする、総タイトル数で800点ほどの娯楽読み物群を指しており、通常これを山東京伝の『忠臣水滸伝』（前編寛政11〈1799〉・11、後編享和元〈1801〉・11刊）を境目として、大きく初期（前期）読本・後期読本に二分している。初期は短編集、後期は長編の形態を典型とする。

その読本を総体として理解・把握しようとする際、最も基本的なのは、大著『読本研究 江戸と上方』（1974）を初めとする横山邦治氏の研究業績である。現在私は、（もちろん私なりの検証作業を経た上でのことであるが）、横山氏の案出された読本の分類語彙を、ほとんどそのまま継承・使用するようにしている。本稿に用いた「〈稗史もの〉読本」というタームも、後期読本の中核部分をなす「京伝・馬琴の読本を頂点とする怪奇で複雑な伝奇的構想を有し、そのうえ勧善懲悪・因果応報の理念に支えられた純然たる仮作物語」（『読本研究』、109頁）に、横山氏が命名されたものである。〈稗史もの〉読本の展開については、寛政期後半から文化期前半にかけて、江戸の地において、先行する〈中本もの〉読本を水先案内として形成され、上方〈絵本もの〉読本（〈図会もの〉を含む）との競合を経て、上方においても優位に立ち、ついには全国津々浦々に流通するようになって行った、との見通しのもとに全体を把握すべきもののようと思われる（したがって、後期読本の中核を指す分類語彙としては、江戸読本・上方



読本のように、形成された地域を強調した呼称よりも、横山氏に倣って〈稗史もの〉読本と一括した方が一層適切と考える）。しかるに従来、〈稗史もの〉読本の形成過程の理解に際しては、その前提に、常に京伝・馬琴の対立と馬琴の勝利という通説があった。横山氏もまた、〈稗史もの〉読本の展開を、馬琴読本のそれと平行に論述され、そのことが、〈読本〉全体の理解にも如実に反映している。

横山氏の〈読本〉理解は、ご自身明示しておられるように、中村幸彦氏のそれに依拠したものである。昭和20～30年代を中心に発表された中村氏の関連論考は、〈読本〉全体の把握が、原本の実見に基づく具体性を伴ってきわめて明快になされ、初出から半世紀を過ぎた今でも、読む者に、新たな研究への指針と励ましを与えて、基盤的業績としての価値を生き生きと保ち続けている。しかしその中村氏においても、記述の公平は心がけておられるけれども、最終的に到達された『近世小説史』第十章「後期読本の推移」（1987）に至るまで、「通説」についての認識は、大きく揺らぐことはなかったように見受けられ

る。「通説」は、中村・横山両氏を含め、現在もなお、大前提として読本研究者の前にあると言って良い。

〈読本的枠組〉と「通説」への懐疑

私自身もまた、中村・横山両先達の見解を目安に〈稗史もの〉読本の根幹をなす長編構成の形成過程の解明を課題として、研究に取りかかった者の一人であるが、拙論『優曇華物語』と『月氷奇縁』—江戸読本形成期における京伝、馬琴—（「読本研究」初輯、1987）以来、「通説」とはやや異なる次のような考えを持つに至っている。

「通説」では、〈稗史もの〉読本の第1作は山東京伝の『忠臣水滸伝』であるが、本作の長編構成は、浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』全11段に丸ごと寄りかかることによって支えられており、これに通俗本・和刻本として〈翻訳〉された『水滸伝』の場面が附会されている。対して、第2作『〈復讐／奇談〉安積沼』（享和3・11刊）では、既成作の〈翻案〉のかたちを取らず、物語の展開が超越者の予言とその実現によって挟まれる、独自の長編構成が模索され始めるが、主要な筋立てが二分され、予言はその片方にしか適用されないために、未だ全体的な構成の統一には至っていない。ただ、本作において用いられた文体は、『忠臣水滸伝』で用いた佶屈な〈通俗もの〉調から、なだらかな「和漢混合」体（中村氏）へと切り替えられ、これが後続作における読本文体の規範となった。

〈稗史もの〉読本が独自の長編構成を獲得したのは、京伝の第3作『優曇華物語』（文化元・12刊）においてである。本作では、『忠臣水滸伝』『安積沼』での試行錯誤を踏まえ、全編を超越者の予言で覆うことで、その内側に置かれた個々の挿話が、互いに突出せず安定した状態を保っている。この方法は、以後、〈稗史もの〉読本における長編構成の核となっ

たものであり、私はこれを〈読本的枠組〉と名づけている。

ところが、『安積沼』よりも早い序文年記をもつ曲亭馬琴の〈稗史もの〉処女作『月氷奇縁』が、『優曇華物語』と同時期（文化2・1）に刊行されている。本作には、『優曇華物語』と同様の〈読本的枠組〉が備わり、趣向・文章表現の上でも、『優曇華物語』との類似箇所がきわめて多い。けれども馬琴に関しては、『高尾船字文』（寛政8・1序刊）等、前後の時期の〈中本もの〉と比較してみても、京伝において辿れるような形成過程を見出し得ず、逆に『月氷奇縁』には、『優曇華物語』を模倣した痕跡を、わずかながら明確に指摘し得る。これは、京伝・馬琴が対立関係にあるとすれば起こり得ないことであり、「通説」に対する懐疑の出発点となったが、この問題については、後に改めて申し述べることにしたい。

〈稗史もの〉読本の分類

〈稗史もの〉読本の〈読本的枠組〉は、人間・動物・モノ・言葉等、様々なかたちで作中に置かれている。これらは通常、物語の発端近くで存在を提示され、以後それと明示されなくても、場面ごとの展開の背後に強く存在が看取され、結末は、例外なく、言葉の謎が解かれるなり怨霊が解説するなりして、作品世界の中からそれらの存在が消えた時に訪れる。つまり〈稗史もの〉の小説的展開は、これらによって領導されているのである。

京伝・馬琴を中心に、個々の作品の〈読本的枠組〉に注目しながら、〈稗史もの〉の読本の長編構成について理解を積み上げて行く作業は、新たな認識の広がりをももたらしてくれた。それは、横山氏の施された〈稗史もの〉の下位分類のうち4種（〈仇討もの〉・〈伝説もの〉・〈巷談もの〉・〈史伝もの〉）については、従来行われてきた素材のみに基づく分

類とは異なり、〈読本的枠組〉の施し方と抜きがたく関連した、構成の〈型〉の問題として説明できるということである（なお私案では、横山分類のうち〈お家騒動もの〉は、例外的なものとして省略し、より一般的な項目として〈一代記もの〉を加えている）。以下項目ごとに略述してみる。

〈仇討もの〉は、前述の京伝『優曇華物語』・馬琴『月氷奇縁』が代表作。構成は他に比して最も単純であるが、これを殺人によって始まり、その復讐の完遂によって閉ざされる物語とのみ規定したのでは説明不足で、被害者の側には、そうなるだけの因縁が、常に、時には加害者と直接には無関係なかたちで付加されており、仇討ちは、主人公の艱難辛苦の結果、その因縁が消滅したとされる時点で、はじめて成功する仕組みになっている。したがって、話の面白さを左右するのは、その因縁（〈読本的枠組〉）の施し方の巧拙ということになる。これはまた、後続の〈稗史もの〉全般に言えることである。

〈伝説もの〉は、馬琴の『石言遺響』（文化2・1刊）を初作とし、文化3、4年頃に多く見られる。一般に良く知られた説話・伝説に素材を求め、〈読本的枠組〉の時間的尺度を三、四世代にわたって広く取ることで、素材の読本的解釈が示される。なおこの型は馬琴主導によるもので、京伝読本には見られない。

〈一代記もの〉は、〈伝説もの〉と同時期に行われはじめ、代表作は京伝『桜姫全伝曙草紙』（文化2・12刊）。長編勧化本に学んで、成仏（または破滅）に至る登場人物の伝、または高僧一代記を〈読本的枠組〉とするのが原形である。京伝読本にその展開を辿ることができるが、馬琴読本にも作例がある。

〈巷談もの〉は、京伝『梅花氷裂』（文化4・2刊）の試みを、馬琴が発展させたもの。演劇作品（浄瑠璃が主体）の良く知られた場面を後半のクライマックスとし、そこに至る〈読

本的枠組〉を設けて、新たな展開・結末を示して見せる。馬琴『三七全伝南柯夢』（文化5・1刊）が代表作。

〈史伝もの〉は、馬琴の『椿説弓張月』（文化4・1～8・3刊）によって確立した。歴史文献を用いた〈史実〉に隣接するかたちで〈読本的枠組〉を設けて小説世界を展開させ、その完結が〈史実〉の範囲を越えない、いわゆる〈演義〉の体を志向する。〈稗史もの〉読本の代表的な型と考えられているが、『弓張月』を含め、〈巷談もの〉の発生と重なる時期の〈史伝もの〉においては、演劇的色彩の強い場面をクライマックスに置いている。

なおこれら5つの型は、萌芽も含め文化4年以前には出揃っていることを申し添えたい。

京伝、馬琴と〈勧善懲悪〉—「通説」の相対化

こうして〈稗史もの〉読本は、〈読本的枠組〉に基づく〈型〉の工夫を積み重ねながら展開して行くのであるが、その先導者である京伝・馬琴は、必ずしも〈読本的枠組〉の施し方そのものにおいて対立しているわけではない。そこに、無理に対立を想定するよりも、少なくとも文化4年に至る〈稗史もの〉読本の形成期において、京伝・馬琴は兄弟作者であることを前提にしたほうが、先に触れた『優曇華物語』と『月氷奇縁』をはじめ、両者の作品に多く指摘できる類似の理由を、素直に了解し易いのである。もちろん、京伝が兄、8歳年下の馬琴が弟であって、この時期、京伝を主体として両者の目指した方向が文芸的に最も高いレベルで結実したのが、京伝『桜姫全伝曙草紙』であったと考えられる。

しかし、この時期の作であっても、京伝・馬琴の〈稗史もの〉読本の内実には、一読して異なる印象が感じられる。これは、両者における〈勧善懲悪〉観の差異から来るものである。馬琴における善悪が、前世あるいはさらに以前からの、逃れられない因果応報とし

て示されるのに対して、京伝では、善悪はあくまでも個々の作中人物の心の持ち方の問題であり、いわば馬琴の〈善人／悪人〉型に対して〈善悪一如〉型と規定できる。『曙草紙』以後の京伝読本は、すべてこの〈善悪一如〉型が適用されている。馬琴は、京伝のこうした姿勢を、〈演義〉の体を理想とする小説にはあるまじき、演劇（浄瑠璃・歌舞伎）まがいと理解したフシがあり、文化5年以降、小説における〈勧善懲悪〉の「正しい」あり方を、声高に主張するようになる。

馬琴は、他の事例に徴しても、立場の異なる相手に対して、対立的・排他的に自己主張する癖のある人であり、「通説」は、馬琴が、商業的戦略も功を奏して第一人者に上り詰めてからも、来し方を振り返って繰り返し発言した内容が、近代に入り、読本を史的に展覧する際の資料として重用された結果定着したものであろう。「通説」は、もちろん全否定される必要はないが、少なくとも、〈稗史もの〉読本の形成期における京伝・馬琴の関係を考慮して、相対化されるべきものと思考する。

その上で、馬琴最良・京伝最良をも相対化して、〈稗史もの〉読本様式とは何かに虚心に向かい合いたい。その答えは、恐らくすでに中村幸彦氏によって提示された4点、①長編小説であること、②勧善懲悪の思想的裏付けを持つこと、③和漢混合の文体を備えること、④装丁・口絵・挿絵などに留意すること（『読本展回史の一齣』、1958）に加え、⑤脚色を共有すること（濱田啓介「読本における恋愛譚（ロマンス）の構造」、2005）に尽くされているように思う。このうちのどれかが強調され、どれかが貶められて良いものではなく、あくまでもこれらの複合体として総合的に理解されるべきものなのである。ただ、中村氏は①～④を京伝『忠臣水滸伝』に即して述べておられるけれども、本作における新様式の反映は、そのいずれにおいても中途半

端である。私は、〈稗史もの〉読本様式がいちおうの整備を見たのは、濱田氏が、「近世小説の形態的完成について」（2002）で言われる文化3、4年頃が、形態（④）以外の側面についても該当するものと考えている。

プロジェクト研究の中で

以上は、すでに記したように、個人的な研究テーマに発するものであるが、平成16年（2004）に始まった国文学研究資料館プロジェクト研究「近世後期小説の様式的把握のための基礎研究」（～21年）から、様々な刺激と示唆を与えられている。〈読本的枠組〉に対する認識は、共同研究会及びプロジェクトのメンバーによる八戸市立図書館・国文研所蔵を中心とする善本85点の解題作成作業（『読本事典（仮）』として出版予定）の中で、深化・修正されてきた。現在最も注目すべき問題点は、京伝・馬琴を中心とする江戸〈稗史もの〉の強い影響のもとに、軍記・実録・巷談街説等を直接踏まえた〈絵本もの〉から転じたと見られてきた上方〈稗史もの〉に、〈絵本もの〉の流儀がなお色濃く残り、超越者の予言等が、付加はされるものの、実際には〈読本的枠組〉として機能していないという事例が、田中則雄氏を中心に、次々と報告されるようになってきていることである。京伝・馬琴流が十分な理解と咀嚼のもとに浸透した範囲は、意外に狭い可能性がある。ここから〈稗史もの〉読本についての新たな認識が生まれてくるとすれば、プロジェクトの代表者として、望外の幸せと言う外はない。

（本稿は、拙稿「読本研究の現況と提言 1 様式と分類」（『読本研究』第九輯、1995）を踏まえ、現時点の認識に基づいて大幅に改稿したものである。）